縁と身心変容：アジアにおける「縁」概念の比較研究に向けて

　小西賢吾(金沢星稜大学)

2017/04/28　第56回身心変容技法研究会＠上智大学四谷キャンパス

１　発表の目的

＊アジア仏教圏に共通・通底する概念としての「縁」に着目し、その意味・用法の射程について素描する。

＊日本とチベット、中国の事例を中心として、社会関係としての「縁」と、宗教的体験、身心変容としての「縁」の接点を探り、それを研究対象として分析・記述するための方法を検討する。

２　本研究の背景(発表者のこれまでの歩みから)

＊専門：文化人類学。

秋田県(2003年～)・石川県(2015年～)の祭り、チベットのボン教徒(2005年～)を対象とするフィールドワークを主体とする研究。

＊背景１　＜縁から紡ぎ出された研究＞

ボン教徒の研究は、中国四川省シャルコク地方におけるフィールドワークの成果を博士論文および拙著『四川チベットの宗教と地域社会』(風響社、2015年)として出版したことにより一区切りをむかえた。その後、ネパール・カトマンズおよびインド・ヒマーチャルプラデーシュ州のボン教僧院、フランス・ロワール地方のボン教センター、中国北京市と成都市で活動するボン教僧侶と漢族ボン教徒グループなどの調査を行ってきたが、そこでは、ローカルな出自をもつボン教が「民族」の枠を越えて求心力を持っていることに関心をもった。特にゾクチェンの加行(ゴンジョ)を中心とした実践の展開については、本研究会でも報告させていただいた(「チベットの宗教と身心変容技法の社会性」『身心変容技法研究』第3号:25-35)。

　成都市で漢族ボン教徒に話を聞いているとき、結局はラマとの縁(漢語で缘分）があったからボン教に惹きつけられたのだ、という発言を耳にすることが多かった。ヨーロッパでも、ボン教を実践するフランス人に（テーラワーダでも禅でもチベット仏教でもなく）なぜボン教なのかと問うたときに同じ趣旨の発言を聞いたが、「縁」は英語でどのように表現できるのだろうと考えたとき、はたとつまってしまった。そこから、西洋発の概念ではとらえられない共同性のあり様をいかにとらえ、記述すればいいのか、ということに関心を持ち始めた。

　その頃、中国におけるフィールドワークを扱った論集に寄稿し(『中国における人類学的フィールドワークと民族誌(仮)』として風響社から近刊)、自分のフィールドワークを振り返る機会があった。そこで、驚くべき「偶然の連鎖」によって調査が成立したことを改めて実感した。バスの窓から見た風景をみて「ここだ」と直感したこと、シャルコク出身のチベット学の大家サムテン・カルメイ先生が京都大学に招へいされていたこと。自分はシャルコクやボン教と縁があった、と言わざるを得ない状況であった。

　また、同じ頃には秋田・角館の祭りで、修士課程以来の知人が曳山の激突にはさまれ命を落とすという重大な事故が発生した。どのようなことばを丁内(\*ヤマを出す単位)の人びとにかけていいのかわからないまま、混乱の中でいたずらに時間が過ぎていき、再訪を果たしたが、もともと(まさに)「えん(縁)」も「ゆかり(縁)」もなかった祭りにここまで強烈に感情を揺さぶられることに、深い印象を覚えた。そして改めて人びととの関係が数々の「偶然の出会い」と、それに「縁」というリアリティを感じること、によって支えられていることを痛感した。

　フィールドワークに身心を投じる者にとっては、フィールドは単なる「調査地」ではない。カルチャーショックを通じて自分の身心に染みついた「あたりまえ」が激しく揺さぶられ、変容する。その引き金となるのは、異質な他者との出会い、その道を選ばなければ出会わなかったであろう存在との出会いである。まさに、縁がつながる前と後では、まったく異なる世界に生きているような感覚さえ覚える。これを、どのように議論の俎上にのせたら良いのだろうか。

＊背景２　＜分断される世界・社会＞とどう向き合うか

　縁によって結ばれた幸福な経験の一方、発表者が研究をはじめた2000年代初頭以降、世界では多様なレベルでの人びとの分断、無縁化が加速してきた。反グローバリズムの台頭と、国家や民族、宗教を単位とする対立の先鋭化、また「無縁社会論」に代表される、人のつながりの希薄化やセーフティネットとしての「縁」の消滅をめぐる問題が、国内外で展開している。

　発表者もまたフィールドワークを進める中で、2008年のチベット「３・１４事件」や2012年の日中関係悪化など、民族、国家間の対立の現場に直面し、翻弄されることになった。ただそこでの経験からみえたのは、歩み寄りが不可能にみえるような絶望的な溝を跳び越えていくような「人びとの縁」であり、そうした縁に支えられて、日本・中国・チベットをこれまで往還することができたと感じている。帰属集団の枠組みを軽やかにこえていく「縁」を、分断される世界・社会と向き合い生きぬくためにどのように定位できるか。気がつくと、それがこれからの自分の探究の中心になるのではないかという確信が芽生え始めていた。(それは、「縁の行者」こと鎌田先生との出会いによってもたらされたのかもしれない)

　2016年度から科研（若手研究B）「縁概念に着目した宗教的共同性の研究」が採択され、まだごく萌芽的な問題意識を暖めているところであるが、本研究の着想は以上のような背景から得られたものである。

３　「縁」の見取り図

　　＊社会的縁　社会的に構築される縁

　　＊哲学的縁　世界を説明するための縁

　　＊宗教的縁　縁を通じた身心変容

　　+　○○的縁

縁　えにし、ゆかり。関係、かかわり。「結縁」「宿縁」　機会。「機縁」

(仏教用語)物事を成り立たせる外在的な条件、間接的な原因。

[全訳漢辞海(三省堂)1105]

　縁は多様な含意を持つことばであり、多様な領域が重なり合い、相互に影響し合っている。

３－１　社会的縁

　＊地縁・血縁：生得的社会関係としての縁

　＊無縁　網野善彦1978『無縁・公界・楽』

中世日本における土地にしばられない民　　自由な行動／身分の差別　の両義性

　＊異人　縁で構築された世界の外部者としての異人

　→　都市化・産業化と縁の変容：縁の個人化、個人が主体的に縁＝加入集団を選択できる

　＊米山俊直1981『同時代の人類学　群れ社会からひとりもの社会へ』

　　　社縁：会社、職場を通じた縁

　＊上野千鶴子1994「選べる縁、選べない縁」(井上忠司ほか編『文化の地平線』所収)

非選択縁から、より多元的な選択縁へ

　＊ネット時代：特定の場所によらない個人のネットワークへ

伝統的核家族の解体、労働過程の関係の個人化、新しい都市化のパターンなどを背景に、

集団や組織よりも「ネットワーク化された個人主義」と表現できるような社会性の様式が出現

　　　　　　　　　　　　長田攻一・田所承己（編）2014『つながる／つながらないの社会学』

生まれ育った社会・共同体の縁／成長の過程で組み込まれる組織の縁／より主体的に選び取る縁

→　非主体的に巻き込まれてしまうような縁のあり方をとらえるには？？

　＊無縁社会論

　　・「無縁社会～“無縁死”3万2千人の衝撃」2010年1月NHKスペシャル

　　・書籍『無縁社会』2010年11月

高齢者の孤独死から出発した無縁社会論は、地縁・血縁・社縁と言った従来型の関係が保てなくなった時代において、これからいかに他者との関係を取り結び、社会を維持していくのか、というより普遍的な問題として提起され続けている。

　→　縁を生み出し維持するためのインフラ・思想の模索(伝統～最新技術まで)

　　全日本冠婚葬祭互助協会(編)2012『無縁社会から有縁社会へ』

　　　死者、目に見えない存在を含めた縁のとらえ方

　　　縁を想起し再生産する装置としての儀礼

　→　縁を社会関係のみに還元することなく、他の側面へと拡張する視点

３－２　哲学的縁

＊初期仏教における因果関係としての縁

　１２因縁

無明→行→識→名色→六処→触→受→愛→取→有→生→老死→無明→・・・

＊チベット仏教(中観派)における縁起　rten 'brel

ナーガールジュナ『中論』第18偈・第19偈

縁起なるものを我々は空と説く。それは仮に設けられたものであって、それはすなわち中道である

何であろうと縁起して起こったのではないものは存在しないから、いかなる不空なるものも存在しない

　　　　　　　　　　(日本語訳は『ダライ・ラマの「中論」講義―第18・24・26章』大蔵出版2010年)

⇔日常会話における「縁」は、カルマに基づく因果論と結合していることがある。

　ボン教僧AK師による説明 (2013年夏)

　　「漢語で縁分という場合、チベット語ではlas dbang(業・力)にあたる。

縁がある（有縁分）＝las yod red」

　→　las dbang (文語的)

(シャルコク方言ではlas mthun、カム方言の一部ではlas 'brelカルマのつながり)

　チベット仏教僧TG師による説明(2017年春)

　　「仏教哲学的な「縁」と、普通の「縁」は別物。」

　中国のことわざ「有縁千里来相会、無縁対面不相逢」

３－３　宗教的な縁、縁を通じた身心変容

＊縁を通じた身心変容は、しばしば日常の社会的枠組みを越えたところで起き、人生を左右する

＊チベット人の人生の転機となった「縁」：師との縁、因果論的な文脈からはみ出るもの？

・ボン教の高僧シャルザ・タシ・ギェンツェンはこどものころ精神的な病にかかり、高僧テンジン・ワンギャルから「この子供は宗教の道と縁がある。あなたたちはこの子供を、宗教の道に送り出さなければならない。さもないと、この子はあなたたちの役には立たないだろう」と進言されたため、両親は彼を僧にすることを決断した。(Heart Drops of Dharmakaya: Dzogchen Practice of The Bon Traditionより)

・ボン教僧SG師(1970年四川省甘孜州生まれ、現在北京に活動拠点)の語り

　「実のところ、漢地に来たいとは思っていなかった。山の中や寺の中で休んでいるのが好き。でも、師匠２人が、私を外に伝教に行かせた。というのも、私は18歳の時にアバのナンジ寺にいって30過ぎ（32歳）まで勉強して、その後自分の寺に帰ってきて法を説いていた。だいたい６年くらい。そして37歳の時に、アバの師匠（nam mkha' tshul khrim）がきて、あなたは寺の中にいないで、外に出て法を広めた方がいい、といった。私は、まず漢語が話せないし、知ってる人もいないから、この寺の中で過ごしていればそれでいいと答えた。また、36歳の時に、中国藏学研究中心のT先生がボン教の総寺院調査でイェシェー寺に来た、そのとき私は寺の歴史や地名などについて、彼のインタビューに答えた。そして彼は、こんなに学問がある活仏はボン教の中でもまれだが、あなたが漢語が話せないのは大変残念だ。あなたは出てくるべきだ。山の中にいるべきではない。出てくれば多くの機会がある。でも、私は漢語ができないよと答えた。すると彼は、あなたは何才？と聞いた。私は35だと答えたら、彼はこういった、トゥプテンニマは49歳の時に漢語を学んで、56歳の時に外国語を学んだんだ、あなたはまだ36歳にもなっていないし、力もあるからできるはずだといった。私はT先生と知り合って長いけど、この話はしたことない。彼は私に講義などをしたわけではないけれど、私は彼のことを先生の一人だと思っている。

また、もう一人の先生、デルゲのシャルザ・リトのケンボをしていたmthu stobs rnam rgyal、彼もまた私に、漢地に行って法を広めなさい、寺の中にいてはいけないと説いた。この３人のすすめで、私は寺を出ることにした。最初に成都についた時に、ルガという男の人、この人とは知り合って15年くらいだが、もともとアバの裁判所の所長をしていて、その後四川省民政局の副局長、さらにラサにいって、今は北京で弁護士をしている。彼にあった。私がどこに行けばいいのかわからないというと、彼はそれなら北京に来ればいいといってくれた。だから北京に来た。

北京に着いた時には、漢族はチベット人に礼儀正しくしてくれた。仏教や活仏を尊敬していて、すごくいい関係を築けたと思う。しかし、よくなかった部分は、ことなる教派を信じる人が、差別して攻撃することだった。ボン教は邪教だと思われていて、ご飯を食べている途中に突然相手が立ち上がって、あなたとは食事できないといったこともあった。でも当時、私は漢語ができなかったから、なにもいえなかった。その後漢語ができるようになって聞いてみると、かれらはボン教は邪教だといった。それに対して、もし私が邪教で、あなたたちが正しいのなら、逃げるのは私の方で、あなた方に逃げる道理はないはずだ。ボンのどこが邪教なのかあげてみなさいといった。たとえば、かれらはボン教は殺生をするといった。でも私は、ボンのお経のどこに殺生をすると書いてある？といった。～中略～こういう経緯で北京にきたわけ。

北京ではいろんな人に教えを説いてきた。違う教派を勉強する人もいたし私の顔をみてボン教はいいといってくれた人もいた。一般に、人びとのボン教に対する理解は深まったといえるだろう。今、中国の大都市にはだいたい弟子がいる。ゆっくりと発展してきた。縁があったんだ。自分でちょっとづつやってきた。パソコンやブログ、携帯も、人に教えてもらったわけではなくて自分でやり方を身につけた。ブログについては、ある日、弟子が「先生はブログをもってないんですか」と聞いたのでブログって何？って聞いて、博客という字を書いてもらった。そして自分で百度で調べて書き方を身につけた。１週間ほどあまり寝ないで、いろいろ調べたんだよ。～後略」

・QD氏(西南民族大学教員)が語る、サムテン・カルメイ氏との縁　(一部編集)

「小さいころから、父の同級生だったということはきいていた。それが、先生が帰ってくる2日前に父が死んでしまって、先生も来るのが申し訳なくてうちまでこなかった。先生が実家にいると聞いて、夜7時過ぎに車で先生の実家まで行った。父の息子だと知っていたので、よくしてくれた。父のために200元をくれた。2時間ほど標準チベット語で話した。たくさん勉強するようにといわれた。先生の本を通じて、いままではっきりしなかったことがはっきりしてきた。これは非常に重要な変化だった。先生に、多くのものを残してくれるように頼んだ。その後、先生は自分の人生について話してくれた。インドに逃げたあと、街角で偶然ヤンラマ(\*後にボン教総本山メンリ僧院長、シャルコクの同郷)と再会したこと。その時英国の学者(D.Snellgrove)にあって、彼はついにボン教の坊さんをみつけた！と喜んで、100ルピーをくれて、それで衣服などを整えたこと。その後、あなたたちはここにいるべきではないといわれて、イギリスにいって、先生になったこと。その後ヤンラマはラマに選ばれてインドに戻ったこと。こういうのもすべて縁だ」

→　でも、縁はlas(カルマ)だけではない

「シャルコクでは、トパリモthod pa'i ri mo (トパリモ　頭蓋骨、おでこの絵)という言い方がある。これはすべて天(gnam sngon po)の意志で、生まれつきかいてあるもの。仏教的というよりは、ボン教的。たとえば役人になろうと思うとか、なにかの仕事をしたいとか、誰々と結婚したいとか、心で思っていてもトパリモがなければうまくいかない。las yod la red(カルマがあったから)ともいうが、こちらの表現が多い。人と人とのつながりもトパリモ。悪いことにあうのも、トパリモだという。なにか人間関係がよくないとき、がまんしろ、トパリモだ、とかいう。「トパリモの中にbar chad＜障害＞がある」、という言い方もある。人生のいいこと、わるいことはすべてかいてあるという感覚。儀礼をしたりするのは、その絵を書き換える可能性があると考えられているが、本当に効果があるのかは誰もわからない。トルマを用いて悪いものを捨てるのも、同じ目的。ボン教の占いや暦算カルツィ、ナクツィの中にはそれを見極める方法が解説してあるともいえる。私が今、成都にいて教えているのもトパリモ。トパリモは無理矢理にくるものでも、望んでくるものでもない。結婚も、相手に金があるとか、そういうのでは決まらない。自分も、学生の時には成都に来るものとは思わなかった。一つには宗教的原因、もう一つには教師になろうと思って勉強していたからね。1988年当時は、松潘から成都まで3日かかった。茂県まで一日、ブン川まで一日、そこからまた一日。その時収穫の手伝いで実家に帰ってきていた。学校に戻ったら先生に呼ばれて、「録取通知書(合格通知)」が来てるぞ！と言われた。びっくりして大喜びして、それで車を準備して成都までいった。」

→　トパリモは、単なる決定論ではない。

　カルマ的要素／天の差配／自分の主体的働きかけ　が交わるところに、「人生の転機」が生じる。

４　縁の比較研究へ

・「縁結び」「縁切り」誰が結び、誰が切るのか？：仏教的な縁と神道的な縁の関係の位相

　主体の働きかけによる選択縁としての社会関係構築と、半ば受動的に巻き込まれる形での関係構築

　良縁／悪縁／腐れ縁

　『岩波講座「宗教」６絆―共同性を問い直す』の序論では、宗教が生み出す共同性が「自律化」と「脱自化」の対照から検討されている。近代的自我、自律的主体によって「結ぶ」「つなげる」ものとしての絆と、主体から離脱し、「結ばれている」「生かされている」感覚としての縁。(池上 2004:20-21)

→　こうした区分の妥当性については検討の余地があるが、脱自化として縁をとらえる視点は、縁を通じた身心変容という観点と親和性が高い。

　ただし、縁を通じた身心変容と社会的縁をつなぐチャネルを考えるためには、縁がきわめて個人的なものである反面、その人の人生を支えてきた文化、社会、政治、制度的etc背景と密接に連関していることを見逃してはならない。

「縁がある」の類義語としての「世間は狭い」

　世間が狭い＝予想もつかない人間関係のチャネルが発見される(米山　1981：15)

縁の比較研究へ。

　　　仏教的な思想がベースにありながらも、縁の展開は多様

　　　　indigenous な思想／マクロな政治経済状況／自然との関係　などがパラメーター

　　「コミュニティ」とは異なる、「縁」を通じたアジア的な？共同性について捉えることは可能か。

　　　同時に、地域性をこえて人が結ばれていくダイナミズムを捉えられるか。